

非母語話者同士の学びを支える実践

—韓国・中国・スウェーデンをつなぐ遠隔交流の試み—

A Joint Research Project Which Encourages Learning among Non-native Speakers: The Challenge of Web-based Interaction among Students in China, South Korea and Sweden

労軼琛（中国東華大学）・岩崎浩与司（韓国釜山大学校）・

齋藤里衣子（スウェーデンダーラナ大学）・松浦恵子（韓国釜山外国語大学校）

LAO Yichen(Donghua University), IWASAKI Hiroyoshi (Pusan National University),

SAITO Rieko (Dalarna University), MATSUURA Keiko(Busan University of Foreign Studies)

要 旨

本稿は、韓国・中国・スウェーデンの日本語学習者（中級～上級）を集め、2012年の春学期と秋学期の2回行った遠隔交流の実践を紹介する。インターネットというツールを使用することで、自国にいながらにして、複数の言語話者が日本語という共通言語を通してコミュニケーションを図り、視野を広げさまざまな文化に適応できる社会文化能力を育成する。また、学習者の日本語能力や日本文化知識を志向する目的以上の日本語教育の可能性について考えたい。

The purpose of this paper is to introduce a joint research project, which was carried out during 2012 (Spring and Autumn) in collaboration between four universities in China, South Korea and Sweden. This joint research project was established to investigate ways to raise the socio-cultural competence of students who learn Japanese at each university through interactions in their common language, Japanese. This paper also aims to discuss the further possibilities of Japanese language education which are not only limited to learning the language.

【キーワード】 遠隔, 非母語話者, 社会文化能力, プロジェクトデザイン

1. はじめに

私たち発表者は、韓国・中国・スウェーデンの大学生日本語学習者（中級～上級）を集め、インターネットを通じた遠隔交流を行った。

この遠隔交流の特徴は三つある。一つ目は、インターネットというツールを使用することで、自国にいながらにして地理的な壁を越えられること。二つ目は、互いに母語の違う学習者が、日本語を共通言語としてコミュニケーションを図れること。三つ目は、複数の国の学習者が交流をすることで、学習者が互いの文化や思考についてより広く深い視点から学び合えることである。

従来、海外における日本語教育では、日本についての知識教育や日本人とのコミュニケーション能力を育成するための実践が中心的に考えられてきた。もちろん、そのような実践は、学習者が実際に日本へ行ったり、日本人と関わったりするときのための予備的な教育として重要な意味がある。しかし、世界中で133か国、約365万人⁽¹⁾もの日本語学習者が存在する現代において、互いに異なる背景を持つ海外の日本語学習者同士を結び付け、互いをリソースとした学び合いを促進していけば、学習者は日本への知識や日本人とのコ

コミュニケーションだけでなく、世界中の人々と直接交流ができ、よりグローバルで幅広い知見やコミュニケーションの力を得ることが可能になる。したがって、IT技術の発展に伴って可能になったこのような実践は、海外の日本語教育における新たな意義を生み出すものであると、私たちは考える。

本実践に参加した学習者は、韓国・中国・スウェーデンの3か国の大学生である。当然ながら、3か国の学習者は母語や文化的背景、互いについての知識が異なる。しかし、3つの国の学習者は、共に日本語学習者であるという点で共通している。私たちはこうした特徴を持つ学習者同士を結び付け、互いのコミュニケーションと学び合いをサポートすることで、単に日本人からだけでは学べない、参加者同士の言語や文化についての理解が深まることを目指している。

本稿では、2012年の春学期と秋学期に実施した2回の実践を紹介する。2回の実践における学習者からの評判は良かったものの、2012年春学期の実践の結果から秋学期の実践への改善点がいくつかあった。使用するウェブツール、作文のトピック設定、振り返りシートの内容などである。本稿では、私たちがこれまで実施した2回の実践を紹介するとともに、2013年8月3日に行われたポスター発表での参加者の反応と意見も紹介する。

2. 先行研究

遠隔日本語交流というと海外の日本語学習者と日本にいる日本語母語話者とのウェブ上の交流会の形式が一般的である（大塚・金 2008，森山・白田他 2010）。しかし、こうした実践は、あくまでも海外にいる学習者が、ウェブを通じて自国にいながらにして目標言語の母語話者と出会えるという点に特徴がある。私たちの実践もまたウェブを通じての遠隔交流であるが、非母語話者同士を結び付けるという点では、前者と異なる。

また、日本語母語話者と非母語話者（学習者）のコミュニケーションについては以前から研究が多く、接触場面における日本語使用やコミュニケーションストラテジーなど、様々な角度から研究や分析が進んでいる。さらに、日本国内においては非母語話者同士のコミュニケーションについても、研究が盛んである（ファン 1999，春口 2003，ファン 2011）。しかしながら、私たちが実践したような、海外における非母語話者同士のコミュニケーションについては研究が少ない。そのため、私たちの実践は、海外における非母語話者同士のコミュニケーションストラテジー研究としても、価値があるものと考えている。

3. 遠隔交流の目的

本交流会のねらいは、国外にいる異文化の他者との出会いとコミュニケーションを通じた学習者の成長にある。また、学習者の具体的な技能としては、以下の4点を身に付けることを目指している。

- ①異なる言語の母語話者と、日本語を使ったコミュニケーションができる。
- ②自分とは違う言語の母語話者が使う日本語を聞いたり読んだりすることで自分自身の日本語を振り返ることができる。
- ③日本以外の国への関心が広がることにより視野が広がり社会文化能力を高める。

④相手の日本語のレベルに合わせて自分が使う日本語を調節することにより、どんな相手とでも自分らしいコミュニケーションができる。

総じて言えば、日本語を使って、コミュニケーション能力、社会文化能力と自主学習能力を高められる学習環境づくりに力を入れ、このプロジェクトを通して、学習者それぞれの気づきや学びを促すことを目指している。

4. 遠隔交流の概要

本章では、遠隔交流の概要について説明する。

本遠隔交流では、釜山大学（韓国）、釜山外国語大学（韓国）、東華大学（中国）、ダーラナ大学（スウェーデン）に所属する日本語学習者の中で希望者を募集し、授業外活動として交流を行った。参加した学生の内訳は表1の通りである。

表1 参加者の内訳

学習者の所属	2012年度 春学期	2012年度 秋学期
ダーラナ大学（スウェーデン）	5人	5人
釜山外国語大学（韓国）	6人	3人
釜山大学（韓国）	3人	5人
東華大学（中国）	3人	8人
合計	17人	21人

表1の参加者の中で、できるだけ同じ国の学習者同士が重ならないように、チーム分けを行った。春学期と秋学期は同じように、基本は韓・中・スウェーデン1人ずつの3人チームであるが、国ごとの参加人数が異なるため、韓・中、中・スウェーデンの2人チームも組まれていた。

実践期間は、各大学のスケジュールに合わせ、各学期6週間の交流とした。2週間を1サイクルとし、1週目に指定されたトピックについての作文を各自が書いてチームで共有し、2週目に前週の作文を話題とするオンラインセッション（ビデオチャット）に入るということを3回繰り返した。表2は2012年春学期（1期目）の流れをまとめたものである。

1期目となる2012年春学期のトピックは、学習者個人の生活や考えが現れるようなものとして、1回目「自己紹介」、2回目「私の1週間」、3回目「魅力的な人」を設定した。オンラインセッションでは、Google+⁽²⁾を使用した。

学生の自律性を育成するため、教師は各担当チームの初回オンラインセッションのみ参加した。それ以降は学習者に振り返りシートを記入させ、それを通して交流の様子を把握し、学習者のサポートを行った。教師はサポート役に徹し、学習者同士がスムーズに交流しやすいよう環境づくりに重点を置いた。

表2 2012年春学期（1期目）の流れ

	学習者がすること	教師のサポート
プロジェクトの前		チームを分ける 自己紹介の連絡メールを出す
1週目	自己紹介文を書き、メールで送る メンバーの作文を読んでおく オンラインセッションの日時をメールで調整する	
2週目	オンラインセッションを実施する 振り返りシートを担当教師にメールで送る。	オンラインセッションに参加する
3週目	「わたしの一週間」について作文を書く メールでメンバーに送る メンバーの作文を読んでおく	
4週目	オンラインセッションを実施する 振り返りシートを担当教師に送る	
5週目	「魅力的な人」について作文を書く メールでメンバーに送る メンバーの作文を読んでおく	
6週目	オンラインセッションを実施する 振り返りシートを担当教師に送る	
7週目	アンケート調査に協力する	アンケート調査を実施する

2期目となる2012年秋学期では、基本の流れは1期目を維持したが、トピックの選択、使用するWebツール及びフィードバックの方法等に変更があった(表3を参照)。トピックの選択について、1期目は教師指定のトピックを使用したのに対して、2期目は学習者の積極性を促すため、「自己紹介」以外の2回のトピックについて、あらかじめ教師が用意した14個のトピックの中からチームで相談して決めるという方法をとった。用意したトピックには、1期目の最後に行ったアンケートで学習者が提案したものも含まれている。(表4を参照)。1期目のトピックと同様、個人の生活や考えが現れる内容のトピックもあるが、国の違いや社会的な問題など、高度な話題に踏み込めるような内容のものも候補とした。そうすることにより、学習者の関心や日本語レベルにあったトピックを選択できるよう意図した。

表3 2012年秋学期（2期目）の流れ

	学習者がすること	教師のサポート
プロジェクトの前	設備上の準備をする 教師からチームメンバーの情報を受け取る	チームを分ける 自己紹介の連絡メールを出す
1週目	自己紹介文を書く SkyDriveにアップロードする メンバーの作文を読んでおく	

	オンラインセッションの日時をメールで調整する	
2週目	オンラインセッションを実施する 振り返りシートを担当教師にメールで送る。	オンラインセッションに参加する 作文添削 メールでフィードバックする
3週目	作文の添削をメールで受け取る。 チームで決めたトピックについて作文を書く SkyDriveに作文をアップロードする メンバーの作文を読んでおく	
4週目	オンラインセッションを実施する 振り返りシートを担当教師に送る	作文添削 メールでフィードバックする
5週目	作文の添削をメールで受け取る。 チームで決めたトピックについて作文を書く SkyDriveに作文をアップロードする メンバーの作文を読んでおく	
6週目	オンラインセッションを実施する 振り返りシートを担当教師に送る	作文添削 メールでフィードバックする
7週目	アンケート調査に協力する	アンケート調査を実施する

表4 2012年秋学期(2期目)のトピック候補(各チーム2回ずつ選択)

トピック	選択チーム数	トピック	選択チーム数
映画やドラマの感想	4	日本語を学んで日本への考えにどのような変化があったか?	1
親友紹介	2	自分の国の好きなどところと嫌いなどところ	1
私の国, 出身地, 旅行したい場所	2	将来就きたい職業	1
日本と互いの国のイメージ	2	日本製 (made in Japan) についてどう思いますか?	0
お互いの国についてどのくらいわかっているか (クイズを出す)	1	自分の夢	0
私のささやかな幸せ	1	自分の悩み	0
私の住みたい理想的な街 (地理や気候を比べる)	1	最近, 母国の若者の間にはやっていること	0

2期目で使用したシステムについては、それぞれの国のインターネット事情を考えた上、作文の交換はSkyDrive⁽³⁾、オンラインセッションの時はSkype⁽⁴⁾とAdobeConnect⁽⁵⁾の組み合わせという、より効率を上げられるシステムを使用することにした。

フィードバックの方法については、日本語の正確性に自信がないとの声が学習者から挙げられたため、作文を添削する対策が考えられた。ただし、添削はオンラインセッションを実施した後に行うことにした。そうすることによって、学習者は自分のもとの日本

語の力がどこまで通用するのかを、交流会で試すことができると考えたからである。

5. アンケート調査に基づいた分析と考察

それぞれの交流会の最後にアンケート調査を行い、交流の振り返り、分析や考察を行った。アンケートの質問は「交流会について」「人数・メンバー」「期間・スケジュール」「日本語・コミュニケーション」「トピック」などについてである。1期目のアンケート回答者は14名(82.2%)、2期目の回答者は18名(85.7%)であった。3章でこの交流会が目指す学習者の具体的な技能を四つ述べたが、それについて学習者はどんな点で得るものがあったかプロジェクト終了後のアンケートから知ることができた。アンケート結果を分析し、交流会の目的に合致するコメントと合致しないコメントに分類して、表5にまとめた。

表5 合致するコメントと合致しないコメント（一部抜粋）

※（番号は交流会の目的、括弧内は同じコメントを書いた人数）

	合致するコメント	合致しないコメント
①	「相手は日本人ではないけど日本語で会話できたのがよかった(2人)」「日本人と話すよりも緊張しないで話せる(2人)」「お互い日本人ではないからミスしても大丈夫(2人)」「日本語を知らなかったらちゃんと話すこともできなかったはずの外国の人と色々な事を話すことができたのでとてもよかった」等	「お互いに知らないことは話せない」「生の日本語に接することができず残念」「間違えた日本語を覚えてしまう」等。
②	「自分と同じように日本語を勉強している人達と話すことでもっと頑張ろうと思った(6人)」「日本語で話すことに自信がついた(4人)。もう怖くない」「日本語が伸びた」「日本語でメールをすることと日本語で考えることを学んだ」「自分の日本語もまだまだ磨き直す必要がある」「自分の口癖について勉強になった」「漢字はよく知っているが実際には和語を使った方が気持ちが伝わりやすい。これからは和語をもっと身につけようと思う」「視野が広がった」「自分や周りの学習者が使わないその国独特の表現様式が面白いと思った」等。	「みんなの日本語のレベルが違うから、自分が知っている日本語が相手にわからない場合もあった(5人)」「日本人とのセッションなら間違いを直してもらえたのに(3人)」「日本語について学べなかった(2人)」等。
③	「韓国の文化(学生生活)・スウェーデンの文化(5人)、中国の文化(3人)が少しわかった」「外国語についてもっと色々な事を考えることができた経験だった」「韓国と中国の違い」「異文化の人に対してもきちんと伝えればお互いにわかりあえる」「韓国から見た日本のイメージがわかった」「外国人の発音とか日本語に対する考え方を知ることができた」「日本語を使って他国の文化を教えてもらって勉強になった」「日本語を学ぶというのはただ語学力の上達だけでは足りない。もっと日本の社会事情や歴史異文化の差に注目すべき」「日本語はアジア圏の人だけが習う言語だと思ってたがスウェーデン人もいてそれが私の勘違いだとわかった」「以前インターネットのせいで韓国のイメージが悪かったが、このセッションで一変した。どの国にも性格のいい人と悪い人がいる」等。	「日本についていくら詳しくても所詮外国人からの目線なので(日本について)間違えることもある」
④	「話すスピードが速くなく、単語も文法も簡単だ」「話すスピードが少し変	

<p>わった。前はついついスピードが上がりすぎたのに」「お互いに理解するために、どうやって言いたいことを分かりやすい言葉にするかがいい勉強になりました」</p>	
--	--

表5からわかるように、教師が設定した交流会の四つの目的と学習者からのコメントを比べると、交流会の目的に合致したコメントが多く寄せられている。

合致しているコメントの中でも、大きく二つの意見が目立った。日本語の練習になったという意見と、視野が広がったという意見である。お互い非母語話者という立場で会話することは、日本語のレベルの違いから、時として不安になったり会話が滞ったりすることもあるが、それでもコミュニケーションという面から見ると、緊張せずリラックスして日本語を話すことができたという意見が多く見られた。このようなリラックスした雰囲気の中で日本語を使えるという環境は、非母語話者同士の会話ならではないだろうか。また、「日本語を知らなかったら話す機会がなかったはずの外国の人と色々なことを話せた」という意見からも、日本語をコミュニケーションツールとして、自身の視野を広げられたことも特徴として挙げられる。

次に、②自分とは違う言語の母語話者が使う日本語を聞いたり読んだりすることで自分自身の日本語を振り返ることができるという目的に関しては、学習者から以下のような目的に合致した意見が挙げられた。母語の違いによって、和語や漢語の使用頻度が違うことがわかったことや表現様式の違いなどがわかったことなどの意見である。発音、文法、使用する語彙などについては、母語の異なる日本語話者の日本語を見たり聞いたりすることで、母語が変わると使う日本語が変わることに気がついている。それが聞き取りにくいという意見もあったが、そのような場合はチャット機能を使って文字にしたり、インターネットから写真を探して見せたりして、相手にわかってもらえるようなストラテジーを身につけていたようである。これは、インターネットを使った交流会ならではのストラテジーと言えるかもしれない。また、日本語で話すことに自信がついた、もう怖くないという意見や、自分と同じように日本語を勉強している人たちと話すことでもっと頑張ろうと思ったという意見などから、自身の日本語学習にプラスの影響があったことが伺える。

そして、目的に合致したコメントがもっとも多く出たのが③（日本以外の国への関心が広がることにより視野が広がり社会文化能力を高めるという目的）である。「異文化の人に対してもしっかりと伝えればお互いにわかりあえる」や、「以前インターネットのせいで韓国のイメージが悪かったが、このセッションで一変した。どの国にも性格のいい人と悪い人がいる」などの意見から伺えるように、本交流会によって視野を広げ、持っていたイメージやステレオタイプがよい方向に変わったという意見が目立った。日本語や日本についてはたくさん知っていても、日本以外の国についてはたとえ地理的に近い国であっても知らなかったり、テレビやインターネットの情報がその国のイメージとなっている場合が多かったようだが、本交流会を通して、以前から抱いていた先入観を疑う機会を持てたと言える。しかしながら、今回学んだことが学習者達の新たなステレオタイプとならないように教師は留意を促すべきである。

最後に、④相手の日本語のレベルに合わせて自分が使う日本語を調節することにより、どんな相手とでも自分らしいコミュニケーションができるという目的に合致したコメント

として、学習者から次のような意見が挙がった。「前はついついスピードが速くなってしまっていたが、話すスピードを調整するようになった。」「お互いに理解するために、言いたいことをどうやって分かりやすい言葉にするか、いい勉強になりました」などである。このような意見は、今まで日本語母語話者と主に話してきた学習者や、会話にスピードもあり語彙も豊富な学習者から挙げられた。日本語母語話者と話す時と同じ調子で話すと、相手とのコミュニケーションが成り立たない。さらに母語が異なるため、話が通じなくても媒介語となる言語がないため、コミュニケーションを成立させるには、使用する日本語のスピードを調節したり、相手が理解可能な語彙に変えて話をしたりしなければならない。この点については、会話を録音しそのデータを分析するなどさらなる研究が必要となる。

また、教師が設定した目的と合致しないコメントを見ていると、①と②に大きく集中していることがわかる。「生の日本語に接することができず残念」、「まちがえた日本語を覚えてしまう」、「日本語について学べなかった」などの意見である。学習者は日本語母語話者がいないことでプレッシャーや緊張は感じないものの、やはり正しい日本語を知りたい、自分の間違いを直してほしいという要望を持っていることがわかる。しかし、セッションに毎回教師が参加し、学習者の間違いを直していたら、おそらくそれは教室での授業とあまり差がなくなってしまうのではないだろうか。学習者が自ら学び、自ら気づきを得るためには、教師不在の場で自分達で試行錯誤せざるを得ない環境が必要である。学習者が実体験を持って学んでいくためには、主体的に学んでいけるような環境が重要なのである。そのような環境づくりこそが教師の役割と言えるのではないだろうか。

6. トピックとコースデザインの変容

本交流会が目指している「コミュニケーション」と学習者「成長」の内容については、交流会を重ねていくうちに変遷を経ており、毎期アンケートによる分析を繰り返すことで、教師も立場の違いを乗り越え、徐々に教育観を変容させている。

2012年春学期に実施されていた交流会は教師が設定したトピックを使用した。「自己紹介」、「私の1週間」と「魅力的な人」はいずれも学習者個人の生活や考えに注目したものであった。個人的なトピックをめぐる交流を通して、自分は何者かを知り、他者と経験を分かち合うことにより成長し、自己の価値を発見し、その価値を生活の中に反映させるべきを知ることを目指している。また、お互いの経験を深く話し合うことによって、信頼できる人間関係を築くことも狙いの一つであった。

2012年秋学期では、「自己紹介」以外のトピックは、選択式による決め方をとった。トピックは表3に示しているように、「映画やドラマの感想」、「親友紹介」のような個人の生活や考えが現れるものもあれば、「日本と互いの国のイメージ」、「自分の国の好きなどところと嫌いなどところ」のような国と社会の違い、または社会問題が語れるものもあった。

1期目から2期目にかけてのトピックと選定方法の変更の背景には、個人的なトピックを扱うことによって人間関係を築くことのみならず、個人と社会、また言語と文化の関連といった、より抽象的なテーマについて、異なる立場から話し合う機会を作ることが必要だと教師が考えるようになったということがある。

また、本発表の対象ではないが、3期目にもトピックやコースデザインを一部変更した。2期目の交流会では、一部の学習者が相手を配慮しない行動や言葉遣いを見せた。文化的

背景が違えど、思いやりの心を持つこと、相手を理解する努力をすることはコミュニケーションに欠かせない要素である。そのため、3期目の交流会では、選択方式のトピックをやめ、配慮表現や待遇コミュニケーションについて話し合うトピックを導入した。しかし、このトピックは、学習者に狭い意味での「敬語」の問題と受け止められてしまったこともあり、必ずしも教師の狙い通りにはいかなかった。4期目の実践では、さらに3期目の反省を踏まえた改善を行っている。この3期目、4期目の実践報告については、本発表の対象外であったため、稿を改めて詳述したい。

以上のように、教師たちは成功や失敗の反省を生かし、トピックやコースデザインの策定を行っている。前述したように、教師たちは「他者との出会いとコミュニケーションを通じた学習者の成長」を目指しているが、そのコミュニケーションの内容については、いくつかの変遷をたどっており、現在も更新中である。

7. ポスター発表から得られた知見

フォーラム当日、ポスター発表では多くの質問とアドバイスがあった。例えば、「なぜこの3カ国なのか」、「プロジェクトを立ち上げたきっかけは何か」、「トピックの決め方、教師指定と学習者自ら選んだトピックはそれぞれどんなものか」などである。

中では、「学習者は何を求めて交流に参加しているか」との質問は最も大きなヒントを与えてくれた。一口に希望者と言っても、「参加したくて参加した人」と「人数調整のため教師から参加を依頼されて参加した人」との違いはやはり大きい。この質問を受けて、交流会の前と後とを比較対照できるように、交流会が終わった後だけでなく、事前にもモチベーション調査を行うべきだとの自覚を持った。

また、質問者の中には、本実践と類似した遠隔実践を行っている方もいた。共通していた問題は、最適な学習環境を作るためのシステム選びである。「道具はしばらく使っているうちに「使っている」という意識がなくなり、それを使って実行している作業そのものに集中できるものでなければならない(佐伯1997)。」にあるように、本実践でもシステム選びには試行錯誤を要した。ビデオチャット選びや作文交換の方法である。参加者が交流自体に集中できるようなシステム選びも、このような交流実践の鍵となると言える。

他にもいくつか建設的なアドバイスがあった。「録音をとっているなら、1チームを細かく追うなど、具体的な内容に踏み込んだ研究を行ったら良い」、「アンケートに「日本語や日本について学べない」という意見が書かれていたが、一部の人の意見のようなので、どんな人がそう感じるのか、もう少し焦点化したほうが良い。おおざっぱなアンケートで終わらせてしまうのはもったいない」、「教師間の思想や考えは少しずつ変化したり一致していったりしているはずなので、そういうプロセスを研究するのも面白い」などである。以上のアドバイスから、今後、様々な視点から研究を考えていく必要性を感じた。

8. 今後の課題

これまで積み重ねてきた実践経験、またフォーラム当日に得られた知見を踏まえ、今後の課題を次のようにまとめたい。

①正しい日本語を学びたいという学習者からの要望については、次回以降の交流会で学習者に交流会の目的を事前にしっかりと伝えておく必要がある。

②トピックの設定については、学習者の関心と教師の要望を融合するように考えていく必要がある。

③今回の発表では、実践の概要を紹介するにとどまったが、今後さらに具体的に一つのチームや一学習者を追うなどし、踏み込んだ研究をしていく必要がある。

以上の点に加え、引き続き課題として挙げられるのは「教師間の連携」である。目標の共有、丁寧な事前準備と常にフォローアップする心構え、途中問題が起こっても諦めない姿勢など、教師の信念と対応が交流成功の鍵となる。実施する教師次第の実践であるゆえに、協力しあえる教師の確保、教師間の意識統一が実践を継続させるポイントだと考えられよう。

注

- (1) 国際交流基金(2009)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』による
- (2) Googleのサービスのひとつであるソーシャル・ネットワーキング・サービス。「ハングアウト」の機能では、ウェブカメラを通して複数の相手とコミュニケーションできる。
- (3) Microsoftのオンラインストレージサービス。正式名称はMicrosoft SkyDrive。Windows Live IDを持つユーザーに対して、7GBのストレージを無料で提供している。
- (4) Microsoftが提供する、インターネット経由や携帯回線で無料通話ができるソフト。テレビ電話だけでなくチャット(インスタントメッセージ)も可能である。
- (5) Adobe®が提供する、オンライン会議、eラーニング、WebセミナーのためのWeb会議システム。複数人が参加するWeb会議やチャットなど、様々な機能がある。本遠隔交流で使用したAdobe Connectはダーラナ大学が所有するものを利用した。

参考文献

- (1) 大塚薫・金才鉉(2008)「日本語母語話者参加型遠隔ティーム・ティーチング授業の試み」『メディア教育研究』Vol.5, No.1, 115-121
- (2) 国際交流基金(2009)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』
- (3) 佐伯胖(1997)『新・コンピュータと教育』岩波新書
- (4) 春口淳一(2003)「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー —第三者言語接触場面における会話参加の一考察—」『千葉大学日本文化論叢』5, 73-86
- (5) ファン, S.K.(1990)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語学』第2巻 第1号, 37-48
- (6) サウクエン・ファン(2011)「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』第150号, 42-53